

論文の内容の要旨

論文題目 韓国における教師を中心とした学校改革に関する研究
－1990年代後半以降の韓国社会における学校像の模索過程に注目して－

氏 名 申 智 媛

本研究は、1990年代後半以降の韓国において、画一的で競争主義的な学校教育の変化を目指し、教師をはじめとして、親、市民が中心となった学校改革の動きが活発化したことに注目して、社会的、政治的な動向と教師の自主的な教育運動や教育実践、また海外の学校改革事例の影響が連動しながら、新しい学校づくりの波が創られていく過程を、教師の経験を中心に据えながら描き出すことを目的としている。

韓国や日本を含めた東アジアの国々では、高度に産業化された学校教育を、グローバル化し情報化してゆく今後の社会に向けてどのように再構築するのかという課題の下で、新しい学校教育に向けた教育改革が進められている。本研究では東アジアの国々の学校改革の一例として、韓国の学校改革の事例を取り上げた。

本研究では2003年から2015年まで、韓国における教師が中心となった学校改革を実践する学校及び教師に対して筆者が行った調査に基づき、次の3つの課題について論じた。第一の課題は、1990年代後半以降韓国における学校教育に対する改革要請はどのような社会的な文脈の中で起こったのかを明らかにすることである。第二の課題は教師をはじめとする学校教育の当事者が中心となった学校改革が具体的にどのように展開したのかについて検討することである。そして第三の課題は、学校改革の個別事例の内部構造に注目し、教師がどのような学校の変化を必要とし、学校や授業を変える実践の中でどのような困難と可能性を経験しているのかを明らかにすることである。本研究の各部各章の内容は以下のように概括できる。

第1部第1章では、アジアのグローバル化と教育改革という背景の中に韓国の学校改革を位置づけた上で、先行研究を検討し、第2章では研究の課題と方法を示した。

第2部では公教育に対する市民の失望が表出され、新しい学校教育が積極的に模索された1997年から2009年を、時代的な背景として、教師を中心とした学校を変えるための教育運動と実践について検討した。第3章「韓国の授業の風景—教師の統制と管理を中心とした授業—」では、教師の学校改革の意志の背景には、日々の教育実践の中で感じる違和感や葛藤があるのではないかという問題意識から、韓国の授業の風景と教師の役割の特徴を描き出した。公立初等学校の授業記録を分析した結果、授業は主に教師の主導の下で展開され、教師は子どもを管理、統制する役割を遂行していた。

第4章「新しい学校教育のあり方を追求する代案教育運動—E学校を事例として—」では、1995年以降活発化した代案教育運動に注目し、代案学校と公教育制度内の学校が学校改革において連携する上で主要な役割を果たした代案学校の事例を検討した。事例対象の学校が新しい学校教育を模索する過程では、代案教育と公教育の教師たちが連帯する場が設定され、日本の「学びの共同体」としての学校改革等国外の実践事例が参照されるなど、オルタナティブな学校教育の内容を形づくるための議論と実践が蓄積された。学校教育のオルタナティブを創造することの困難を経験しながらも、同校は、「参加」、「ケア」、「共生」といった価値を基盤とした学校教育のあり方を発信する役割を担っていた。

第5章「韓国の公立学校における『理想の学校』の可視化と教師の経験」では、2000年代の初めに公立学校において生じた教師を中心とした学校改革の事例に注目した。当時新しい学校教育への実験は、大学受験などの制約がある公教育体制内では困難とされており、公教育外部の代案学校で主に行われた。その中で、廃校危機に瀕した小さな公立学校を舞台に、子どもの生活と体験を中心に据えた新しい学校づくりが展開された。事例からは、学校教育の変化を求め教育運動や実践を重ねてきた教師の熱意と経験が、親と地域住民の新しい学校への期待と出会い、教師、親、地域が学校改革のために連帯したとき、「公立学校では困難」という常識を乗り越え、「小さな学校」や「農村部の学校」といった制限を、新しい学校づくりの実験の契機へと変えられることが示唆された。

第6章「韓国における『学びの共同体』の受容と展開」では、韓国において「学びの共同体」としての学校改革が受容された背景と、2009年までの初期段階における展開の様相について記述した。「学びの共同体」としての学校改革の理念と方略は、「教師の自律的な学校づくりや授業づくりが制限されてきた歴史」、「学力的な優秀性と学習への動機の間大きなギャップを抱える子どもたち」、「自律的、専門的な教職文化の必要性」を背景に、教師に訴える力を持ったものとして受け入れられ、一部の大学研究機関や代案学校を中心に実践が開始されたことを示した。

第3部は2009年から現在までの学校改革の動向に焦点を当てた。第7章「革新学校を拠点と

した教育改革—教育行政と学校現場の協力による学校改革の始動—」では、韓国の学校改革に必要な転機をもたらした「革新学校」の始動と実践を取り上げた。第2部で取り上げた代案教育運動、新しい学校運動、「学びの共同体」としての学校改革など教育の民主化に向けた教育運動及び教育実践の積み重ねを基盤として開始された「革新学校」は、京畿道の教育監選挙の公約として初めて登場した。全国で最も「革新学校」の規模が大きい京畿道では、教育庁による上意下達式の教育改革から抜け出し、教育庁が教師の教育実践を支援する形の学校改革へ転換するための努力が教育庁と学校においてなされていた。ある中学校の事例からは、教育行政が教師の変化への意志を汲み取り、教師の本務である授業の探究を促し、教師の学校改革の経験を外部者と共有する機会を設ける役割を遂行することで、教師が学校改革の積極的な実践者、参加者となり得ることが示唆された。

第4部では、韓国の教師を中心とした学校改革の具体的な実践例として、2010年から現在における「学びの共同体」としての学校改革の実践学校と教師の事例を取り上げた。第8章『「革新学校」における校長と教師の学校文化の革新への追求』では、「学びの共同体」を学校改革の方針の一つとして採用している「革新学校」における校長と教師の学校改革の経験について検討した。事例対象の高等学校は「学力と生活に困難を抱えた生徒たちの多い新設学校」という、一般的に見れば厳しい状況の中で「参加とコミュニケーションを中心とした希望と信頼の学びの共同体」を掲げた学校づくりをスタートした。校長は学校づくりを通して韓国の高次教育の常識を覆す公教育革新モデルを提示したいという熱意を抱いており、教師たちは「学びの共同体」として学校改革を参照した授業公開と授業研究会を通して子どもたちの学力面と生活面におけるきめ細かいケアと支援を行っていた。このような取り組みを開始して3年後には参加と協同を中心とした学校文化の形成と大学進学での成果という結実も見られ、大学受験対策が最優先とされるため、教師による授業改革が困難と考えられてきた高等学校における民主主義的で質の高い学校づくりの可能性が示された。

第9章「学校改革における教師の経験—『学び合い』を中心とした授業への転換—」では、授業改革を実践している一人の教師の経験に注目した。教職生活を通して子どもの捉え方や同僚教師との関係性に違和感を抱いていたこの教師は、「学びの共同体」としての学校改革との出会いを通して教育観の転換を経験する。この教師の経験は、新たに赴任した「革新学校」における授業改革と学校改革の実践に影響を及ぼし、同僚教師と連帯しながら子どもの学習と成長を支える学校文化の形成に寄与していた。この事例からは、一人の教師の日常的な違和感に基づいた教育観の変化が、同僚教師の授業改革にも影響を及ぼすことで、学校改革における教師の連帯を生みだし、教師を中心とした学校改革を可能にしていることが示された。

本研究を通して明らかになったのは次の3つの点である。第一に、1990年代の政治的な民主化に伴い、韓国では、民主主義的な学校づくりのための教育改革が推進されてきた。しかし同時に競争主義的で個人主義的な学校教育に対する市民の懸念と不安の声は「公教育崩壊」議論へ

と拡張し、新しい学校を追求する動きが生みだされていった。第二に、教師が中心となった新しい学校を追求する具体的な動きとして、「代案教育運動」、「小さな学校運動」、そして「学びの共同体」としての学校改革があることを明らかにし、これらの新しい学校を追求する動きが連帯、拡張し、「革新学校」という公教育改革の基盤となったことを示した。第三に、学校改革の個別事例から、教師の学校改革への意志は、それぞれの教師の教職生活の特有の文脈の中で生まれた授業づくりや子どもとの関係性における違和感に端を発していることが明らかになった。また、新しい学校を追求する動きが活発化した当初は、公教育体制内では受験対策に偏重した学校教育の克服が困難とされていたが、民主主義的で質の高い学校教育に向けた教師たちの実践とその成果が発信されることによって、公教育における学校改革が「可能な改革」として語られるようになったことが示された。今後の課題として、「革新学校」において、教育行政と学校が具体的にどのように連携し、持続可能な公教育改革を実現していくのかという問題、そして「学びの共同体」としての学校改革が、韓国特有の文脈と個々の学校の独自の文脈に根ざした学校改革へと進展する様子と、その中で一人ひとりの教師が学校改革をめぐる固有の言葉と実践を紡ぎだしていく過程をより詳細に記述する問題等が残されている。